議会レポート

発行者　鈴鹿市議会議員 石田秀三
鈴鹿市伊船町2751　電話 371-0423
2017.3.30 №２２６　FAX 371-2469

老朽施設の建て替えを

新年度予算で、石薬師小の体育館建て替え、西条保育所の移転建て替えに向けた費用が計上されました。その完成予定はどちらも平成31年度、利用できるのは３年先の32年度からです。体育館は1974年、保育所は1978年の建築で築40年ほどですが、ほかにも同じ時期に建てられた校舎や園舎が、市内に多くあり、老朽化対策が迫られています。

校舎や園舎の多くは、これまで大規模改修や耐震改修が行われた所もありますが、トイレなどの改修が遅れています。学校体育館では、あと３校（庄野、河曲、牧田）が残ります。また、保育所園舎では西条より古い３園（玉垣、算所、合川）が残ります。これら急いで改築すべき建物の計画が出来ていないことが、大きな問題です。

この改築ペースでは、老朽化に追いつかない

今のように一つが終わったら次にかかるというペースでは、体育館も保育所も10年以上先まで待たねばならないことになります。そして、その間に「築30年超」の建物が「築40年超」に上がっていくので、ますます先送りになっていく恐れがあります。

「財政がきびしい」という理由で、建て替えや修繕の予算が抑えられてきた結果、多くの老朽建物が取り残されてきています。財政事情によってやめてもいい施設ではなく、子どもたちが毎日過ごす校舎や園舎です。待ったはききません。

種　別	棟　数	築40年超	築30～40年
学校校舎等	１１８	４８	５４
学校体育館	４０	４	１５
保育所園舎	１０	４	４

いま必要なことは、緊急の整備計画を立てて、短期間に改築や修繕をやり切る体制、予算措置をとることです。

学校エアコン設置、１年目が完成

３月19日、学校エアコン設置の第１期工事の完成式が、稲生小で行われました。教室へのエアコン設置を、文科省ではなく環境省の補助事業として行なったこと、２年で全市の900教室への設置を完了すること、業者からのリース方式で行なうことなど、これまでにない方法で出来ました。「モデル事業」として全国で4件とのことです。当日は環境省の地球環境局長がじきじきに来市，式典であいさつされました。

エアコン設置、太陽光パネル（合計300ｋｗ）、照明のＬＥＤ化、をセットで行なう「公共施設等先進的ＣＯ2排出削減対策モデル事業」という長いのが、正式名称です。

鈴鹿市にとっては、早くできて財政負担が楽であるという、このモデル事業にサッとエントリーしたことが功を奏しました。めったにないことです。

教室に取り付けたエアコンを示す森川議員

マイナンバーへの出費５億３千万円

すべての国民に番号をつけて管理するための共通番号「マイナンバー」制度が、昨年から施行されています。３月議会での橋詰議員の質問の中で、マイナンバー実施のためにこれまでかかった経費は、約５億３千万円との答弁がありました。しかも、そのうち鈴鹿市の負担額は２億９千万円と、国よりも多くなっているとのことです。システム構築、カード交付事務、セキュリティ対策などに、多額の費用と手間がかかっています。鈴鹿市だけでなく、全国の自治体もれなく負担させられているので、その総額も莫大なものになります。税金のムダ使い、地方自治体泣かせの制度と言わねばなりません。

一方、市民の皆さんにとっては、何もメリットはなく、税申告などあらゆる書類に記入させられる面倒が増えるだけです。マイナンバーカードの発行も、まだ１万４千枚、人口の７％ほどで、多くの市民はこのカードを必要としていません。それよりも、自分の個人情報が他人にもれたり、自分の知らない所で勝手に使われたり、というリスクの方が問題になります。

そもそも、原発って何であかんの？

3月4日「さようなら原発・三重パレード」の集会で、小出裕章さん（元京大助教）の講演を聞きました。「原発って何であかんの？」と題したお話で小出さんは、「そもそも」から分かりやすく解説してくれました。

処理できない「核のゴミ」がもうじき満杯になる

◎原子力発電とは、発電タービンを回す蒸気を作るための「湯沸し」である。火力（石炭・石油）で沸かすか、ウランで沸かすか、が違うだけである。しかし火力と違うのは、大量の放射性物質（核のゴミ）を生み出すところ。
◎100万ＫＷの原発１基が１年間運転すると、ウランから１トンも放射性物質が生成される。（広島原爆で燃えたウランは800グラム、その1250倍！）
◎この核のゴミは、未だにその始末の仕方が分かっていない。無害化までに100万年もかかる！
◎日本の原発が1966年から稼働して、できた核のゴミは、広島原爆の90万発分も溜まっている！処理できないので原発の内部に保管しているが、もうじき満杯になる！
◎地中処分もできない。六甲山（900m）は100万年前には、海の底だった！

話を聞いているだけで、気が遠くなってきました。

いちど事故が起こったら止められない

◎火力発電所で事故があったら、運転を停止して直せばいい。しかし原発の事故は、いちど起こったら止められない。
◎福島原発は事故から６年経っても、近づくこともできない。焼け落ちた炉心がどうなっているのかも、分からない。
◎事故当日に発令された「原子力緊急事態宣言」は、今も解除されていないし、今後何十年も解除できない。日本はずっと緊急事態下にある！

再稼働など、もってのほか。ただちに全ての原発を廃炉にすることしか道はないと、改めて認識することが出来ました。

あの東芝が会社存続の危機にあるのは、福島の事故の後もなお、原発を主力にした経営を続けようとしたからです。もう目を覚ます時ではないか？

ずいそう

言葉によって進む社会を

今年１月に出版された３冊の岩波新書を読みました。どれも「言葉」を大事にし、仕事にしている方が書かれたものです。

「キャスターという仕事」国谷裕子著

1993年から昨年まで23年間、ＮＨＫの報道番組「クローズアップ現代」のキャスターを務めた国谷さんが、言葉によって問い続けてきたことを語る。国内では何度かの政権交代、バブル崩壊からの経済の停滞、格差の広がり、国外ではソ連・東欧の崩壊、9.11同時多発テロとイラク戦争、また阪神と東日本の大震災、原発事故など激動の中で、国谷さんはその時々の中心人物へのインタビューを果敢に行なってきた。

「日本のなかには、いわゆる『同調圧力』と呼ばれる空気のようなものがある。ここ数年はその圧力が強まっているとさえ感じる」国谷さんは、批判を浴びても「聞くべきことは聞く」姿勢を保ってきたと語っている。

「シルバー・デモクラシー」寺島実郎著

テレビのコメンテーターとして、はっきりもの言う寺島さん。戦後生まれの団塊の世代の一員として、「シルバー・デモクラシー」という言葉を使う。人口が１億人を超えた1966年、65才以上の高齢者は７％だったが、１億人を切る2048年には高齢者が40％に迫る。有権者の50％を高齢者が占める時代、わが世代は次世代への責任をどう果たすのか、という問題提起である。寺島さんは、いま求められているのは、高齢化し単身化し二極分解している都市新中間層の社会参画だと言うが、その道すじはこれからだ。

「対話する社会へ」暉峻淑子著（てるおかいつこ）

「対話が続いている間は殴り合いは起こらない」「戦争・暴力の反対語は対話です」と考える暉峻さんは、自分が住む町でいろんな人と集まって「対話的研究会」を始めた。楽しい会合がもう７年も続いていて、「人々は生の人間との対話に飢えている」ことを実感したという。行政と市民、学校の先生と生徒・保護者、会社の経営者と労働者が、対話を通じて問題を解決していった実例も（その反対の実例も）多く紹介されている。